

蝦夷地善光寺僧による福祉活動の一例

須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

ここに一つの証文がある。次のようなものだ。

「証券

一金三十拾両也 但通用文字金也
右者愚叟今般住職入用ニ付、恩借申処実正也。返金之儀は来戌年善光寺物成松前志摩守殿より被相渡候石代金之内を以返済可申候。為証一札如件

加判

福井千馬助 ㊟

ウス

善光寺 ㊟

文政八酉年十二月

箱館

高田金兵衛殿

「一目で明らかなる如く、借金証文である。『住職入用』の金を恩借したというので

ある。その住職はいうまでもなく「ウス、善光寺」の住職である。

さて、その「ウス、善光寺」というのは、現在の北海道伊達市有殊町にある名刹善光寺のことであって、近刊の『浄土宗大辞典』に筆者が執筆を依頼されて次のように書いておいた寺である。

「寺伝では天長年間慈覚大師創建とするが、信州善光寺如来の常として江戸初期の建立らしい。一八〇四年（文化一）幕府が北辺警備上の一施設として蝦夷地内に三つの官寺を設けたさい、その一つに加えられた。歴代住職中には鷺洲のごとき高德もいる。代々よくアイヌを教化し、その資料が現存する（以下略）」

この名刹の住職が、高田金兵衛という人から金を借りたのである。これは一体どう

いう事情によるものだったのであろうか。

高田金兵衛というのは、かの淡路産の豪商として名高い高田屋嘉兵衛の弟であって、高田屋嘉兵衛は箱館（現在の函館）に店をもち、回漕業から東蝦夷地・千島方面にまで漁場を経営する商人だが、その箱館店には弟金兵衛をおいて差配させていたのである。つまり善光寺住職は、豪商高田屋から金を借りたのであつた。（この証文は嘉兵衛の末裔に家蔵されているのだ）

私はまず、善光寺住職が高田屋家から金を借りたことについて、有珠山の噴火と関係ありと睨んだ。有珠山は最近も噴火して全国的话题となったが、これまでも幾度か大噴火し、そのつど近辺に大変な被害を及ぼしている。

金を借りているのは文政八年（一八二五）だが、有珠山はそれより三年前の文政五年に大噴火を起している。『新撰北海道史』（昭一二）が伝えるその模様は次のとおりだ。

「文政五年（一八二二）閏正月十六日、有珠・虻田に地震数回あり、十七日・十八日には更に甚しく数十回に及んだが十九

日、有珠岳が噴火し、黒煙天を噴し、電光四射し、光景慘憺を極め、和人・蝦夷人共に概ねフレナイに避難した。二十二日には鳴動噴火猛烈となり、室蘭には灰降る事五寸、白昼尚ほ灯を点ずる有様であった。其後少々沈静に歸した如くであったが、二月朔日朝、鳴動殊に甚しく、多量の熱泥を噴出し、猛烈な勢で虻田に流出し、会所を始め、附近の建物全部を嘗め尽し、牧士村田卯五郎父子・虻田請負人と田屋茂兵衛・支配人松之助（茂兵衛の息子）外二名を焼死せしめ、負傷若干名、蝦夷人五十三人、馬二千四百六十八頭中千四百三十頭が焼死若くは行衛不明となった。虻田の部落は全く全滅し、其墟をトコタン（廃村の義）と称するに至り、後フレナイに会所を設け、部落を形成したが、旧によって虻田と呼んだ」

大変な噴火の惨状である。

善光寺は有珠山からいくとも離れておられない所にある。危険であるから当然避難しなければならず、ときの住職弁瑞和尚は海岸を南下した山越内（よこが）という所にのがれ、草庵を建ててしばらくここで過した。その跡

はいま円融寺という寺になっている。しかし何時までもここにいるわけにはいかない。幸い善光寺の建物は無事だったので寺に戻った。だが災害をうけた地元アイヌたちの生活はひどいものがあつた。弁瑞和尚はそれらアイヌたちの面倒を見てやらねばならない。

善光寺が官寺に指定されたときは、幕府から年米百俵、金四十八兩、十二人扶持を下附されたものである。しかし幕府は文政四年で蝦夷地の直轄を打切つたので、それ以後は禄も減り別に松前藩が義務的に善光寺へ金を贈ることになった。その内容を知る史料に恵まれないが、幕府直轄時よりは少なかったようである。だから内情は苦しかった。それでも弁瑞和尚は物心共に出来る限りの援助をアイヌたちに尽したようである。その疲れもあったのか弁瑞は文政八年正月亡くなった。（一説に同七年十一月ともいう）

弁瑞は三代目の住職であつた。四世を継いだのは弁定和尚であつた。弁定は弁瑞の弟子である。冒頭に紹介した証文は文政八年十二月のものである。苦しい台所のあと

を継いで、弁定和尚も随分困つたことであろう。それにアイヌへの援助はこの頃もまだ続いていたと思われる。その結果がこの証文にあるような高田屋家への借金に及んだものと想像される。

どうして私はこういう想像を働かせるかというと、傍証があるのだ。実はこれと同じだったと思われる事件が、この後にも起きているのである。

それは嘉永六年（一八五三）のことである。有珠岳はまたしても噴火したのであつた。『新撰北海道史』にもう一度登場してもらうと、次のようなことである。

「嘉永六年（一八五三）三月五日より有珠岳又も鳴動し、地震を伴ひ、日を経るに従つて烈しくなつて行つたが、十五日遂に噴火し、有珠・虻田の和人夷人等何れも東西に難を避けた。四月十三日（或は三月中を云ふ）熔岩が湧出し。凝結して山頂に一高峰を生じた。大有珠と呼ぶものが是である。松前藩は変を聞くと藩吏を出張せしめて処置をとり、吏を礼文華に止めて陸路の往来を禁じ、砂原・絵鞆間を舟行せしめて翌年に及んだ」

このとき善光寺は長万部^{おしちまんべ}に避難した。當時の住職は七世仙海和尚であつた。仙海はアイヌたちに時々酒食を供与し、その救済に挺身した。だが弁定和尚同様、その資金には随分苦勞したようである。筆者が先年某所で発見したものに、当時、仙海和尚が金に困つて増上寺役所にそれを請うた手紙の下書きがある。次のようなものだ。

「(前略)愚寺儀去る丑三月以来山焼にて、今以相鎮不申右故本尊等守護仕、行程十二里相隔候ヲシャマンベと申処へ立退罷在候。而夷人共立退候場所へ為教化時々見廻候に、一同必死の難渋不忍見聞誠に悲歎至極に御座候得共、時々酒飯等施行仕候得共、長々の事にて施行等も相成兼、且相続も難出来難渋難尽愚筆候に付、不得止御役所に拝借金奉敷願候。何卒夷焼の天災御救奉願上候間、格別の御慈悲を以、速に御聞濟被成下置候様宜御内奏願上候。恐惶謹言」

この手紙は噴火翌年の嘉永七年四月二十日付のものである。仙海和尚のアイヌ救済活動を知る貴重な史料である。

この仙海の行動からみて、前記弁定も、

同様のことをしていたことが想像されるのである。兩人とも資金調達に随分困つたわけだが、弁定は豪商高田屋家に、仙海は本山増上寺に、それぞれ金子拝借を懇願したのであつた。

とくに仙海は、噴火のあつたその嘉永六年の冬に、『念仏上人子引歌』という浄土信仰歌を印行しているのであり、これは物質的援助のほかに、精神的救済を並行させた極めて注目すべき所業で、およそ宗教家の福祉活動というものは、ただ物質的救援にのみ終始するものではなく、必ずや精神的救済活動を伴わなければならないという、宗教本来の面目を教示しているものであつて、宗教家の福祉活動の範たるものであることを見逃がしてはならないと思うのである。

『念仏上人子引歌』というのは、善光寺三世弁定和尚(念仏上人と尊称された)が、アイヌ教化のために作つた信仰歌で、アイヌ語に訳されたものであり、これまた仏僧のアイヌ教化活動を知る実史料として極めて貴重なものである。その印行は初め四世弁定によつて天保三年(一八三二)になされ

ていたが、現在善光寺に遺るものは末尾に「蝦夷ヶ千嶋大曰山七世性誓(花押)印施、嘉永六癸丑冬再鐫」とあつて、仙海の再版であることがわかる。(性誓は仙海の誉名)序は弁定の文で次のようにある。

「一日富永氏なる居士の詣こしに、師房念仏上人蝦夷を誘の一ふしを、此に訳して示せしかば、又なくかしこみらる尊き御教を、我籠耳に受過さんは、最本意なき業にしあれば、一蓮の友と此の妻子を論すたつ木とめせまほしと、疾桜木にえりて四辺に布むと、わりなく乞にめてて頓て写もてあたへぬ。頃は天保水兄童の文月未の五日、えみしが浦曰の山寺仏彦しるす」(仏彦は弁定の号)

つまり天保三年七月弁定が先師念仏上人作の歌を上梓したわけである。その歌は次のとおりである。

「これや人々をしへを聞けよ、はやひおそひかいち度は死ぬぞ、しぬがいやならねん仏申せ、まうす人ならいつなん時に、かりのからだのしにたるとも、せみのぬけがらすつるがごとく、月も日もよくしせざる国へ、往て生れてこころのまま

よ、妻や子どもが可愛そならば、ともにねん仏申がよひぞ、この世はかならずやくなんうけず、後の代はまた浄土にうまれ、ひとつ蓮の台にすみて、ながく樂しみしぬ事ぞなし」

これが全文アイヌ語に訳されており、板木は脇に片仮名でアイヌ語がつけられている。また弁定はこれに返歌のような形で付作し、「今よりはみな人ごとにひびひびに、わすれずまうせなむあみだぶを、阿弥陀仏と常にとふる人はみな、世のさいはいめ来る也けり。阿弥陀仏ねがふ心をみそなはせ、南無阿弥陀仏——とし、やはりアイヌ語を付している。

蝦夷地探検家として有名だった松浦武四郎はこの歌について、『東蝦夷日誌』のなかで「若者には子引歌といへるを作り、是を蝦夷語もて教へ、自ら鉦打囀し舞踊等し、また様にのせ、和人共にも施し給ひし……」と記しており、三世弁端がすでに上梓したように述べているが、それらしい板木は発見されておらない。それはともかく、この歌が「若者」のために作られたものであること、「鉦打囀し舞踊等し」とあ

るとおり、一種の念仏踊であったことは、アイヌに対する念仏教化の実史料としてとくに注目すべきものと考えられる。

仙海和尚は噴火のため、まだアイヌたちが生活に困り、飢寒に泣くその（嘉永六年）冬にこれを印行しているのだから、その所業は前述のように、宗教家の福祉活動の面目として極めて注目すべきものがある。酒飯施与による物質面での援助だけではなしに、信仰歌の印行とその普及とによって、精神面での救援にも身を挺しているのであって、正に仏教福祉の実践といえるであろう。

松浦武四郎の『東蝦夷日誌』は文久三年（一八六三）から五年にかけて記したものであるが、その武編（文久三年の首言あり）に、有珠地方でアイヌが念仏を称えていた事実を、次のように記している。

「土人等エナヲを奉りて南無阿弥陀仏——と合掌称名しける故、予も牛に曳れて念仏し、按るに流石善光寺近辺の土人成る故也と、門前の子供習はぬ経を讀との譬、如何もと感じたり」

これは正しく善光寺代々住職の教化力によ

るものであるが、とくに天災時になお一層念仏教化した仙海の力が大きく影響していることは想像にたかない。

（弁定が子引歌を印行したのは天保三年で、文政五年の噴火から大部たっているから、このほうは噴火との直接的な関係は認められない）

弁定和尚の経歴は史料に判然としたものがなく、今の段階では不詳だが、仙海和尚のほうはいくらも判っている。長州の産で、ながく江戸増上寺で学び、天保九年（一八三八）から弘化四年（一八四七）まで善光寺副住職格で蝦夷地に在任、嘉永二年（一八四九）江戸駒込専念寺住職となり、同四年十二月、改めて善光寺正住職に任命され、翌年再度蝦夷の土地を踏んだのであった。その業績は数多いが、とくに蝦夷地内に十数ヶ寺もの末寺を建立しているのである。その中には当時日本の最北端の寺院となった宗谷の護国寺もあり、仙海和尚こそ日本の最北に寺院を建てた最初の人であった。蝦夷地に仏教を興隆せしめた功績者の一人である。明治五年六月十四日函館の善光寺休泊所で亡くなり、同市称名寺に

墓がある。

史家のなかには善光寺僧等の教化業績を不当に過小評価するものもある。例えば高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（昭四七）には次のようにいう。

「たとえ布教の効果はあったとしても、極小範圍に止まりしかもほとんど表面的なものにしか過ぎず、それが土人の精神界に与えた影響は極めて狭小であったと見ても差支えはないだろう」

だがこの論は前言の如く過小評価というものである。いま高倉氏の論を詳駁する紙数をもたないが、異宗教をきらうアイヌたちが、南無阿弥陀仏と念仏を称えていた事実とは、看過できないものがある。

いまここでは有珠山の噴火にまつわる話題のみを紹介しておいたが、この他に特筆すべきアイヌ教化業績は非常に多い。

二世鷺洲も高德の人であった。筑前の人で、博多妙円寺に出家し、のち江戸小石川伝通院の賢州上人の門に入って学び、またかの有名な徳本行者の薫陶をうけ、文化三年（一八〇六）三十五歳のとき善光寺二世に迎えられた。仏寺に親しまぬアイヌたちに、

濁酒を与えて寺へ近づくの仏縁をつくり、同四年ロシア人がエトロフに侵入して蝦夷地が緊迫した空気に包まれたさい、たとえ敵の砲丸に当って倒れるとも、捕虜のはずかしめをうけてはならぬ」とアイヌたちを諭し、誓詞を作って一人一人に与え、仏旗を立てて土地を守備させた。文書伝道にも力を入れ、『後世の技折』という書をかき、

仏教福祉発展の意義

——過激派を対象として——

梶 原 重 道

（浄土宗善導大師遠忌事務局長）

転換期を迎えたということばが、マスコミを通じて流されてから、もう数年以上にものなる。

このことばは、もとより日本自体の物心両面にわたる転換を、意味していることは云うまでもない。

しかしこのことばの使用が、うすれてしまったと同じように、はたしてどれだけの転換がなされたであらうか。

『一枚起請文』をアイヌ語に訳して教えたりなどした。その行状は『徳本行者法弟小伝』にも「夷人の悦服振古その比を見ずとぞ」と記るされている。

これら先徳の業績を仰ぐにつけても、筆者などは、ただ自分の今日の至らなさを恥じるのみである。

あるいはこの転換期ということによつて、全く一大転換をして影をひそめるのではなからうかと、かすかな期待をもつたものに、過激派運動なるものがあつた。

しかし実際はそれどころか、この無差別的行動は激化した。

たとえば全学連の安田講堂事件から、連合赤軍の浅間山荘事件や、企業爆破の連続から、最近の成田空港事件への進行状態を